「ハレとケ」通信

第29号

「非日常」と「日常」の、日本の風情のかたちを楽しむ暮らしをご提案する季刊誌です。

建設に携わることの幸せを、おすそわけ。

物語のある建築（29）

―『お寺とは何か』を見つめ直す―

浄土真宗 本願寺派 松心山 教法寺改築及納骨堂新築工事

樹齢六〇〇年超、直径15m！

中津万象園【大傘松】

修景プロジェクトの舞台裏！

平成30年　初春　発行

中津万象園の四阿の前に咲く水仙。

「―『お寺とは何か』を見つめ直す―
浄土真宗本願寺派 松応山 教法寺改築及納骨堂新築工事」

高松市の円座に、モダンで、シンプルで、美しいお寺が生まれた。たぶん、初めてこのお寺を見たひとは、あまりにも従来のお寺とは違うスタイルに、口を揃えてこう質問するに違いない。

「このお寺の形で、良かったんですか？」と。

そう尋ねると、松下住職は確信をもってこう答えてくれるだろう。

「これが、今の時代に求められるお寺の形です」。

―その新しいお寺【浄土真宗本願寺派 松応山 教法寺】が、今回の【物語のある建築】の主人公である。

正面より納骨堂を見る

「お寺のあり方が変化してきている」。そんなお話しを、色々なお寺から伺うことが多くなった。家族のあり方が変わり、地域や宗教との係わり方が変わり、その時代の変遷に合わせてお寺に求められる、果たすべき役割は変化してきている、と。

でも、お寺の役割とはなんだろうか？お寺が守らねばならないことは、(信仰以外に)何だろう。そしてそもそも、お寺はなんのための場所なのだろうか。

今回の主人公である【教法寺】の答えは後述するとして、まずはこの教法寺の歴史を振り返りたい。

【浄土真宗本願寺派 松応山 教法寺】は、天文年間(一五三二―一五五五)に、覚円住職によって建立されたお堂が始まりである。当初のお堂に祀られていたものは、仏像であったか名号であったかは定かではないというが、その後一六二〇年(元和六年)には新しいお堂が建立され(住職／正円)、一六六二年(寛文二年 住職／教円)には本願寺の末寺となる。(記録ではこの教円が初代住職だが、『教法寺』の寺号は一六九一年(元禄四年 住職／教清)から(それまでは教円坊)。)

本願寺の末寺になるということは、つまり、本尊となるべき仏像を本山(西本願寺)から下付されたということを意味するが、それには本尊を迎えるにふさわしい寺としての格式や形式を備えていることが必要となる。また、その頃すでに寺にあったとみられる掛軸の大きさがかなりのものであることから、ある程度の規模をもった本堂となっていたことが想像され、以降、教法寺は門徒によって支えられる浄土真宗の寺として継承されてきた。

お寺には『寺領』を基盤とする寺と、『檀家』を基盤とする寺とがある。他の組織で例えるなら、『財団』と『社団』のイメージだろうか。信仰を守り必要な儀式を行うだけでなく、お寺の構造物や伝統行事等を守り、維持するためには、ある程度の経済基盤が必要だが、江戸時代にはそれが、『寺領』から上がる収穫によってか、檀家による寄進等によってかで賄われていたというわけだ。そして現在、「お寺のあり方が変化してきた」という背景には、もちろんその変遷があり、寺領の喪失、檀家との関係性の変化が大きく関与している。

さて、現在の教法寺の住職は、教円より数えて十七代目に当たる松下了宗氏である。一八四〇年頃に建築された本堂を、この度建て替えるという決断をした人である。とても大きな、難しい決断だったと思うが、それは、明治七年、明治二五年、昭和三年、昭和三八年、昭和六三年と大修理を経たのち、再び大修理の必要となった本堂を前に、「ご門徒にとってもお寺にとっても一番良いあり方はなにか」を考えた末のものだった。

「当時のお寺には、冷暖房がない（効かない）、トイレが屋外で使いづらい、入り口の階段や建物間の段差、多くの扉が存在している…という難点がありました。この建物を使い続けるということは、それらの難点もそのまま継承するということ。はたしてそれが、高齢者の方が増えてきた今、ご門徒が集まる場所として本当にふさわしいのか、時代錯誤ではないのか…、とまず考えました。そしてまた、度々の大規模地震で、多くのお寺が倒壊するのを見て来ましたし、教法寺のお寺の本堂も、屋根だけで大変な重量があると聞いて、『これはもう無理だろう』とも感じたのです。

それでも、江戸時代から続くお寺の建物を倒すのには勇気が要ります。そこで、総代さんに、『この本堂を使い続ける限り、ご門徒の皆さんには大修理のたびに、1戸当たり何十万円といった大きな負担をかけ続けることになります。でも、ここでもっとメンテナンスの楽な、コストも合理的な建物に建て替えれば、毎年五千円ずつの積立金の負担のみにすることができます。いったい、どちらが良いでしょうか？私には、大修理の度に必要な高額負担を、皆さんに求め続けることはもうできないと思うんです。』と相談しました。ご門徒に『お寺を修理するから何十万円お願いします』と当然のようにお願いできる時代じゃないでしょう。」。

平成十八年からご門徒の皆さんと積み立ててきた費用を基準に考えると、本堂改修を行った場合の必要額を積み立てるには、80年の年月がかかる。それを10年で実現しようと考えるなら、単純に現在の8倍の負担を各々にお願いせねばならなくなる。でも、その8分の1の費用で、維持費のかからない新しい本堂を考えるなら、今の積立金でなんとかなる。—その事実を全門徒と共有し、アンケートをとり、話し合った内容をもとに、本堂の建替えという結論に至ったのだ。

それはつまり、「お寺とはこういう形の建物であるべきだ」という固定観念からの開放でもあった。

「昔は、相手の身分や格式によって応対を変えなければならない時代だったし、だからこそ寺としての権威付けの機能も必要でした。本堂のスペースにしても装飾にしても、建具や畳にしても、通常よりも大きい、『寺仕様』のスケールがありますよね。でも、それって、本当に必要でしょうか？」

そして、住職が自身の中で問答を繰り返すうちに生まれてきた答えがある。それは、『お寺の役割とは、ご門徒が快適に集まれる場所であること』だった。

「宗派によって本堂の役割は変わると思いますが、教法寺の場合なら、『古くて由緒のあるお寺だから残した方が良い』という意見よりも、いつも集まってくださるご門徒の快適さの方を大事にしたいと思ったのです。快適な場所だからこそ人が集まるし、お寺の伝統行事や文化も継続していくことができます。

おそらく、お寺はそもそも建立当時には、地域の中で最も“快適な”場所だったのではないでしょうか。それが、まわりの建物はどんどん新しく便利に進化するのに、お寺だけは古いままで大事に使い続けられてきたから、いつの間にかその快適性が逆転してしまったのではないかと思うのです。」

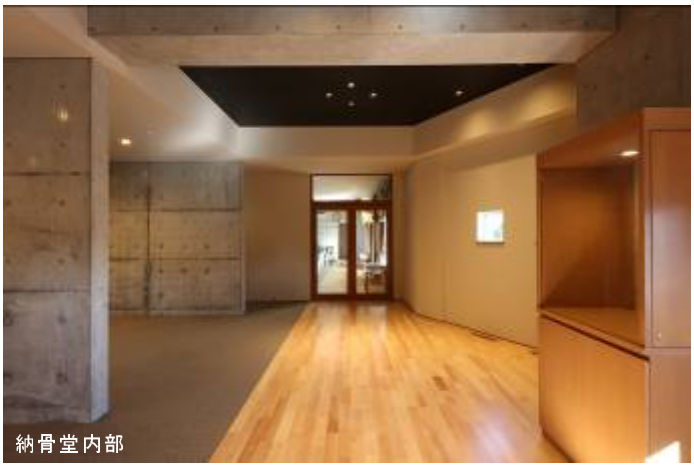
『できるだけ長く、快適に集まれる場所であり続けること』を判断基準にすると、新しい本堂に求められることは明確になってくる。メンテナンスの必要性が少なく、暑さ寒さが凌ぎやすく、コストが合理的で、建物が使いやすい・・・などが重要なことで、権威や歴史を象徴するような装飾や演出は必要ない。お寺であれば当然のように

快適に過ごせる本堂。コンクリート打ちっ放しと仏像の組み合わせに、違和感はない。

思われてきた従来の本堂内の大きさや構成も、「自分（住職自身）さえ『これでいい』と思えれば、不要であることに気がついた」という。

また、いったんそういった思い込みから解放されてしまうと、従来のお寺ではない、思い切った本堂の姿を追求したいと考えるようにもなった。

そして、そのような意図の元で選んだ設計者が、竹内建築設計室の竹内慎治氏だった。竹内氏は、高齢者や子ども向けの施設や店舗など、使い勝手や快適性を求められる建物を多く手がけており、スッキリとしたデザインの作風が印象的で、「この人なら従来とはまったく違う、新しいお寺を一緒に作ってくれる。」と信じられたという。


納骨堂内部

「竹内さんと一緒にお寺を作るのは本当に楽しかったなあ。これでもう終わりか…と思うと寂しい気持ちがするほどです（笑）。

竹内さんには、誇張ではなく、本当に何十回も図面を描き直してもらい、不明確な部分がなくなるまで、繰り返しやりとりをしました。自分の求めるもの（例えば今回使用したコンクリートに塗装した液体ガラス（シールシステム）など）を見つけるためには、手間も時間もかなり費やしましたが、設計者と一緒に本気で建物を作るということが、こんなに楽しいものなのか、と心から面白かったです。

私が要求するのは、従来のお寺の形には囚われず思い切った発想で、ということと、『メインは使い勝手、そしてそこにデザインを少し』というものでしたが、竹内さんはちょっとニコッとしながら『デザインは少し』の部分を提案してくる。その『少し』の具合が、私は本当に好きでしたよ。」

その竹内氏の設計のもと、平成二三年には、庫裡を除却。翌二四年には庫裡が完成（こちらの施工はファンホームさんによる）し、続いて本堂を解体、仮本堂を計画し、そのまま二五年春にはそれを本堂へと変更する（施工は富士建設）。そしてこのほど完成したのが、納骨堂である。どの建物もこれまでの固定観念を覆す美しさだ。

「お寺がこれから地域で果たすべき役割はなんなのか…、その答えのひとつは納骨堂でしょう。でも、それにも増して必要な役割が、『ご門徒もお寺も心地良い、安心していられる場所であること』だと思うのです。それは建物の大きさといったハードの側面だけではなく、『地域とお寺とが支え合っていく』という関係性の中から見えてくる、お寺のあり方の問題でもあります。

『お寺が地域で必要とされるには、どうあらねばならないか？』を考える上で、ご門徒に経済的な基盤の点で負担をかけ過ぎないでいいということは、発想を自由にします。」

由緒ある、歴史あるお寺の建物を守り続けようとすることから開放されることで、すべての人にとって心地の良い関係を実現した教法寺の物語は、『建物とはなにか』を考えるうえでも大きな教訓となるように思える。

「本堂を倒そう、と決心するまでは本当に苦しかった。でもその固定観念から解放されると、未来の姿が明確になりました。今の時代に必要なのは、元の本堂ではなく、今の本堂です。」

本当の勇気とは何か。地域でなさねばならないことは何か。冷静に、熱く未来を見据えた判断に、心を揺さぶられた物語でした。

※次ページの「新　教法寺の設計にあたって」に続く

新/教法寺の設計にあたって

㈲竹内建築設計室　竹内　慎治 氏

設立：昭和62年2月
業務内容：住宅、商業建築、医院などの
設計・監理

設計にあたって私には、固定観念にとらわれず、快適で門徒もお寺も心地よく安心して集まれる場所を現実的なコストで造るというテーマが与えられた。

積立金による無理のない建設費で建てたいという御住職さんの提案により、3期工事に分け、1期で庫裡を建て、次に仮本堂を建設、しばらくしてから最後に本堂を建て仮本堂の納骨堂を広げた上、残りを展示室とする計画で始まった。

まず全体の完成図で機能的な動線、増築を容易にする配置などを考慮に入れて立案した上で庫裡の建設から取り掛かり仮本堂を竣工した後、このスケール感で必要十分とお考えになられたのか、将来納骨堂の重要性を感じられてかは分からないが、仮本堂が本堂に変更され3期工事に納骨堂を建設する事と成った。

今更言うまでもなく建築とは人を自然現象から身を守るために造るシェルターである。古来より日本の建築は身近な材料である木材を使い骨組みを造り屋根を造って天害から身を守ってきた。

その建築の中でもお寺は「永久志向」の空間である。無論、永久不変の建築などあり得ないのだが、可能な限り永久的であることが志向され必要以上に太い柱、壁、床、必要以上にしっかりした屋根、そういった「必要以上」が集積して「お寺らしさ」の基本的イメージを構成してきた。

特に大屋根であるが故に仏様のご加護のもと崇高な守られ感を醸し出し、高さ故仏様に少しでも近づけ地域のシンボルとなり人々が集まれる場所であった。

旧のお堂を拝見して、まさにそのような「お寺らしさ」があり歴史の重さとも相まって重厚感を醸し出していた。

だが御住職のお話をお聞きするまでもなく現代においてその使い難さと維持管理の大変さは容易に想像できるお堂であった。

又、お寺はその永久志向の建物であるがゆえ天変地異の大災害の折には、その地域の避難場所にもなるべき場所でもあるが旧のお堂は大震災の時にはその重い大屋根が揺られ瓦が雨のごときふりそそぐ姿を想像出来る建物でもあった。

今回の新しいお寺の基本的な構造は、現代の身近な自然素材とも言えるコンクリートを使い、打ち放し仕上にすることにより重量感と守られ感を醸し出す事とし、屋根は重い大屋根ではなく軽い鉄骨造で金属葺の屋根とする事で、頭の部分が軽いため地震の折には横揺れの力を半減させる構造で地震災害に備える構造とした。

内部は冷暖房効率を良くするため

既存建物に使われていた瓦を外構に活かす。

硬質発泡ウレタンで屋根、壁、床下を全て覆い尽くしてある、又一種換気の熱交換器による温度管理された空気を床下に送り天井から排気する空気循環により床下からの冷え込みを和らげる仕掛けも組み込んだ、もちろんお寺という性格上一日中エアコンを掛け空気循環を廻す機会はあまり無いのだが行事事など人々が多く集まる時には効果を発揮してくれると思っている。

断熱材のある外壁側は仕上げを施しているが間仕切壁などは内部であっても仕上げせずコンクリート打ち放しの表情で素朴さと重量感を出し、天井は安易な方法だが黒として旧お堂の高い天井のほど良いうす暗さを再現している、黒という色は遠近感をあいまいにする色であり実際の高さより高いかの如く錯覚させる、大屋根高天井の雰囲気を意識しての色合いである。

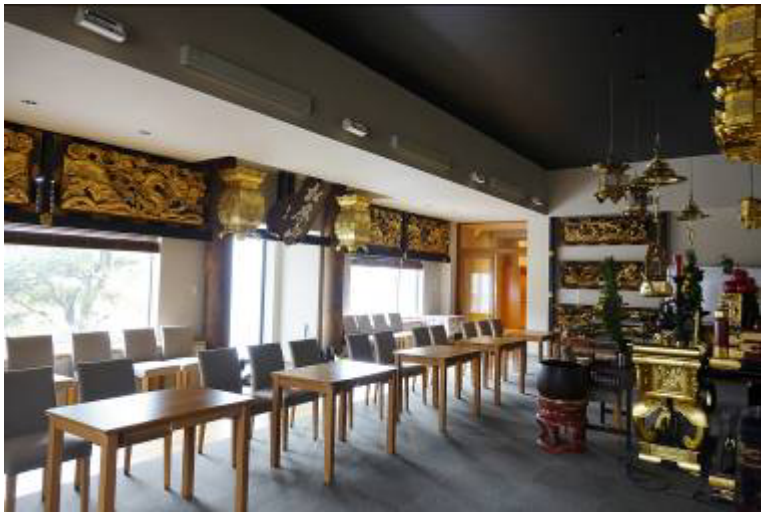
この打ち放しと黒の天井を背景とする事でご本尊様を強調し浮かび上がる効果を狙っている。

又、お堂を新しく建て替えたとしても教法寺の長い歴史を断ち切るわけにはいかないので、旧お堂の木材の一部を柱や造作材として使用し、障子や欄間、梁に掘られた竜の彫り物、瓦、石材などを装飾として組み入れ長い歴史の痕跡を残す事を心掛けた。

外壁には御住職自ら探して来られたガラスコーティングを施工して、メンテナンス回数を大幅に減らす事が可能に成りこの様な構造により建設コストを下げメンテナンスも容易なお堂が完成出来た。

竣工後、外構の整備を少し残しているだけの姿を見て、改めてこの様な先を見据えた大変革の英断をされた御住職やご家族、それを認められた総代さんや理事の方々、素晴らしい人たちに巡り合えたことを幸せに思い大いに感謝している今日この頃である、又丁寧に施工して下さった富士建設さんにも感謝している。

（【物語のある建築（29）】了）



既存建物に使われていた欄間を新・本堂に。

樹齢六〇〇年超、直径15m！

中津万象園【大傘松】修景プロジェクトの舞台裏！

丸亀市の指定名勝 中津万象園内にある、樹齢六百年超、直径15mを超える【大傘松】。今は美しい姿を見せるこの松ですが、実は、昨年の今頃は、二〇〇四年の台風の被害時の痕跡を残して形が崩れてしまったまま、手を付けられずにいました。

でもここは、園内のいちばんの見どころ。一念発起して、36年前にも傘松を修景してくださった中西勉さんのご指導のもと、ゆがみを補正し、往時の姿を取り戻しました。特別に、その舞台裏をお見せしますね！

〇傘松の修景手順

①松の大まかな現状の形と、目指したい姿のイメージを掴む

②芯を決める

③芯から放射状に縄を張り（雪釣りのような感じ）、基準線を定める

④基準線に合わせて、凹凸や厚みを修正していく

簡単なように聞こえますが、安易にカットしたり、枝を曲げたりしてしまうと、「今年は良いけど、来年以降はカッコにならん」ようになってしまったり、「木自体が元気がなくなる」ようになってしまったり…と一筋縄にはいかないよう。そりゃそうですよね。傘松って、生きているんですもの。

美しくなった傘松に、ぜひ会いに来て下さいネ♪

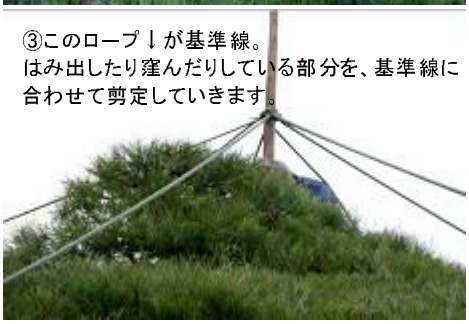
①全体の形を把握。
どこを芯にするか、
イメージを決めます。

↓右側が中西さん。左は
当園造園課の田口課長。

②お庭さん手作りの秘密兵器。棒にロープを取り付け、放射線状に松の上に張ります。

お米で
お清め。

③このロープ↓が基準線。
はみ出したり窪んだりしている部分を、基準線に
合わせて剪定していきます。



④中西さんの秘密兵器その2。基準線となるロープより窪んでいる
箇所は、梃子の原理で枝を持ち上げて固定します。（上右写真は
中西さんの指導の
もと練習中の堀口。）

←傘松を見ながら
話す田口と渡邉。

すっきりと見違えるように美しい形になりました！

中津万象園を愛した京極のお殿さま、高朗公の漢詩集

「琴峰詩抄に親しむ（3）」

丸亀をこよなく愛した京極家六代目藩主 高朗公（号を琴峰と称する。1798-1874）の漢詩集【琴峰詩抄】より、詩をお届けいたします。

旅の途中で、また領内のあちこちで、詩の題材を発見して歩いた“琴峰さん”。このお殿さまは漢詩を趣味とし、生涯に一万首にも及ぶ詩を詠んだといわれていますが、日々の喜びや出来事などを丁寧に詠った詩の数々は、まるでお殿さまの体温が伝わってくるようで、知れば知るほどあたたかい気持ちになってきます。その中から、まずは8回にわたって、お城から中津万象園へ至る道の情景を詠んだ漢詩をご紹介します。

雪後赴中津途上（巻四）

霞映城頭出曉暾。
雪晴天気似春暄。
笠欹琪樹々邊影。
屐印瓊田々上痕。
渠水澄々飢鷺立。
山峰皓々凍鴉飜。
預知滕六兆豊歳。
白盡來牟抽處村。

城の天辺が霞に映る朝焼けの中出ていくと、
雪は晴れて春の暖かな天気のようだ。
笠を傾けると美しい木々が影をつくり、
履物が田圃の上に美しい痕を残す。
湛えられた水は澄んで餌を探す鷺が立っており、
山の峰は白く清らかに凍り付き鴉が飛んでいる。
雪の神が豊かな歳の兆しを予言しているようで、
真っ白に覆い尽くされたところから村を探す。

原文／丸亀市資料館「琴峰詩抄」より抜粋
意訳／中津万象園　写真／雪の日の母屋（造園課・田口撮影）

【編集後記】今回の【物語のある建築】は、教法寺さま。ずいぶん早くにインタビューをさせていただいたのに、発行がここまで遅くなってしまったこと、本当に申し訳ありません。

先般、富士建設の代表者が、真鍋雅彦より真鍋有紀子に変更となりました。どうぞ、皆さまには今後共変わらぬご厚誼とご指導ご鞭撻をお願い申し上げます。

企業運営―つまり、実業とは、世の中に欠けてはならないもの、誇るべき責務です。でも、そこに数寄風流が添ったとき、はじめて生まれてくるものが本当はあるのではないか、と考えています。

「箙へ梅の枝をさして戦場を駈け廻るはいいじゃあねえか。それともお前さん、梅をさす位なら、矢を一本でも余計に持てと云うかえ」。

小説『勝海舟』（子母沢寛）の中にある言葉です。

箙（えびら）とは、矢を入れて肩や腰に背負う筒のことですが、わたしたちが目指したいのは、まさにこの心意気。戦場を駈け回るのに、役に立たないようにも見える梅の枝という情緒、その花一輪を添える心で、実業に立ち向かいたいのです。

元来、建設業とは、目に見えないものへの敬意を抱く職業です。自然界にある木や石や土をつかって、地面に穴を穿ち、モノを建てる。

「どうぞ、手のまがい足のまがいなく無事に工事を終え、ここに住む人に弥栄の未来が訪れますように。」常にそう願い、神への感謝と祈りを捧げるのです。そしてそれもまた、花一輪に通ずる想いではないでしょうか。

―責任感と誇りをもって、実業を全うする。

―柔らかな心で文化に触れ、吸収し、表現する。

企業が実業に真剣に向き合い、かつ数寄風流が添ったとき、それは情緒と潤いを生むものとなりえます。

「箙へ梅の枝さして戦場を駈け廻る。」

ちょっと恰好をつけて、この心意気で、わたしたちは、建設業というフィールドを駈け回ります。

**********御意見、御感想をお聞かせ下さい**********

建設業許可：香川県知事許可（特 28）第 189 号／一級建築士事務所：香川県知事登録 第 416 号／宅地建物取引業免許：香川県知事登録（10）第 1997 号

富士建設株式会社

本社：〒769-1101 三豊市詫間町詫間 300 番地 1
TEL0875-83-2588（0120-832589）
FAX0875-83-5864
http://www.fujikensetsu.jp
mail y-manabe@fujikensetsu.jp （真鍋有紀子）

【発行者紹介】富士建設株式会社は、現存する五重塔55基のうち2基を建立し、「建築は文化なり」を理念に掲げて、官公庁建物・各種施設等大型建築物をはじめ、数寄屋風住宅、デザイン住宅、リフォームまで幅広く施工している。
また、県下において 1300 区画超の宅地開発・分譲の実績を持ち、「街づくり」に対する貢献には定評がある。なお、丸亀市指定名勝である「中津万象園」の修復維持保全活動も行っている。

■営業所：高松営業所・丸亀本店・観音寺営業所
■中津万象園・丸亀美術館／丸亀プラザホテル／味処 懐風亭